

称号及び氏名	博士（社会福祉学） 大友 秀治
学位授与の日付	2019年3月31日
論文名	スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョン実践モデルの生成—参加型評価を活用したエンパワメントに着目して—
論文審査委員	主査 山野 則子
	副査 児島 亜紀子
	副査 小野 達也
	副査 大島 巖（日本社会事業大学教授）

論文要旨

本研究は、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWer）をエンパワメントし事業体制を変革するスーパービジョン（以下、SV）を明らかにし、現場に活用できるSV実践モデルを生成しようと試みたものである。

序章では、主にスクールソーシャルワーク（以下、SSW）実践が展開されにくい困難性と、本研究への焦点化を行っている。近年、ソーシャルワーク（以下、SW）は学校や司法、多文化領域などの新たな領域におけるニーズが高まっている。そのようななか、2008年度から文科省によるスクールソーシャルワーカー活用事業（以下、活用事業）が開始されたことに触れ、SSWerは、Germainが指摘したように、子どもや家族、コミュニティが社会的力量を高めるための援助をすると同時に、三者のニーズに対する学校の応答性を高める援助も行う、「二重の機能」があることを特徴づけている。さらに、困難性として、「二重の機能」を福祉領域とは異なる学校をフィールドに実践することを取り上げている。このような困難性を有するSSW実践を機能させていくためには、教育と福祉をバックグラウンドに持つ者同士が、それぞれの強みを発揮して協働し合う体制に、活用事業そのものを変革していくことの重要性を指摘し、学校領域の特徴に合わせてSSWerを育成し、なおかつ活用事業も包括的に把握しているスーパーバイザー（以下、SVr）がこの役割を担えると位置づけ、本研究をSVに焦点化した経緯を述べている。

第1章では、我が国のSSWとSVの現状と課題を示し、国内外のSVの先行研究を検討し

ている。SV 研究には、海外研究から代表的なものとして、社会的役割理論に基づくもの、システム理論に基づくもの、クリニカルソーシャルワークに基づくもの、関係性理論に基づくものに整理し、さらに日本における研究展開を追加し、到達点と課題を示している。そのうえで、本研究テーマである「事業体制を変革するための SV」という視点における吟味を加え、その意味においては、一般的な社会的役割理論に基づく SV とは異なる、エンパワメント理論に依拠することで、SV がミクロの個人成長のみならず、メゾの組織やシステム変革、さらにはマクロの社会構造の変革までも志向するという可能性を論述している。

そこで、エンパワメント理論に依拠した SV という点において、参加型評価を活用してエンパワメントを進め、事業体制を改善しようとしている SVr に焦点化してインタビュー調査を行っている。参加型評価を活用したその手法に含まれる視点やプロセスを質的研究によって明らかにすることで実践モデルを生成しようとするものである。

第2章では、調査デザインを説明している。まず、「スクールソーシャル事業プログラム」に対する参加型評価を SV に活用し、事業体制の改善を試みている SVr に調査対象者を選定した理由を説明した。調査プロセスは、調査協力を得られた SVr 3名に対して参与観察調査を行い、SVr の役割を中心にデータを収集した。次に、インタビュー調査を8名の SVr に対して実施し、参加型評価を SV に活用し事業体制の改善に働きかけるための視点やプロセスを聴き取った。以上から得られたデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）によって分析した。

第3章では、分析結果と考察を述べている。M-GTA による分析テーマは、「参加型評価を活用した SV プロセスでは、どのようなエンパワメントが実践され、それがいかに協働を形成し、組織変革につながっているのか」とした。その分析により示された現象特性は、「SVr が孤立する SSWer へのエンパワメントを始め、協働し合う事業体制を構築しようとする動き」である。

生成されたコア・カテゴリーによる全体のストーリーラインは、以下ように大きく3期で成り立つ。SSW における SVr は、SSWer が孤立し無力化にある要因が、事業方針を巡って教育委員会と葛藤・対立するなどの SSW 特有の困難特性にあることを【パワーレス要因への着目】から見出し、教育委員会担当者と SSWer が課題を共有できるよう SV を行う（Ⅰ期）。そして、研修の開発を通して教育委員会担当者と SSWer 双方に対し【対話を通じた協働の産出】をするエンパワメントを重ね（Ⅱ期）、さらに【SSW 体制の構造的変革】に向けた SV を行った結果（Ⅲ期）、対等な関係性で協働し合う事業体制に変革される。これらの全プロセスに対して、自治体全体を俯瞰し、エンパワメントの視点を持ち続ける【変革推進を支える価値】が、SVr を支える基盤となる（全期）。以上の SV プロセスの分析と考察による結果、事業体制を変革する SV 実践モデルを生成することができた。

第4章では、結論として本研究による新たな知見を示している。第1に、先行研究では、一般的な社会的役割理論に基づく組織目的に沿った確認体制という SV が、規範的に示されているのみであった。これに対して、生成した SV 実践モデルでは、困難性を抱える SSWer

をエンパワメントするとともに、組織体制を管理運営する側にも同時にアプローチするという、その両者の接点に向けて初期段階からエンパワメントに基づくSVを実施していくことの重要性を、実証的に示したことである。

第2に、先行研究の規範的定義による支持的なSVでは、機関への帰属意識を向上させることを重視し、機関変革の仲介者としてのSV_rの役割も理念的に課題として示されるに留まっていた。これに対し、本研究のSSW_{er}をエンパワメントし事業体制を変革するSVプロセスでは、個人的・対人的・社会的エンパワメントの各レベルが相互浸透しながら展開していくプロセスとの関連性を明らかにした。【パワーレス要因への着目】を中心に実践力の源泉を支えるエンパワメント、【対話を通じた協働の産出】を中心に関係性を修正するエンパワメント、【SSW体制の構造的変革】を中心に協働体制を構築するエンパワメントにより、専門家としての自律性と責任が発揮できる、教育と福祉の協働体制をつくり出すための視点と方法を、詳細なプロセスとして提示している。システム開発を志向するSVとして、対話に基づく関係性を重視するSV理論と比較し、本研究では、SV_rとスーパーバイザーとの二者関係も踏まえた上で、対話の目的が二者関係を越えて教育と福祉の協働体制をつくり出すという、組織やシステムの開発に向かうSVが特徴的に示されたものである。

第3に、SSW領域においても、先行研究では事業体制の変革のためのSVプロセスやモデルは明らかになっていない。これに対して、本研究は、SSW領域への実践的示唆として、SV実践モデルの活用を促すSVツールを提示し、事業体制を変革するSV実践モデルを生成したことは、事業体制そのものを再構築するためのSV体制の整備に多くの示唆を与えるものと考えられる。

第4に、SW研究に対する示唆として、社会的役割理論に基づく規範的なSVとは視座が異なるエンパワメント理論と価値に基づいたSV実践モデルを生成したことにより、従来のSV理論では積極的に位置付けられていなかったエンパワメントの概念や原則、価値を付加することで、SV理論により広がりや包括性をもたらす寄与ができたものと考えられる。

今後の研究課題には、SV実践モデルのさらなる一般化と実践的活用に向けた課題、エンパワメント評価との関連性を解明する課題、SVの構造化に関する課題を挙げている。

初出一覧

序章 書き下ろし

第1章

大友秀治 (2015) 「スーパービジョンモデル開発の必要性：スクールソーシャルワークに着目して」『社会福祉科学研究』4, 235-240.

大友秀治 (2015) 「日本のソーシャルワーク・スーパービジョン研究に関する近年の動向」『学校ソーシャルワーク研究』10, 65-76.

大友秀治 (2016) 「ソーシャルワーク・スーパービジョン研究に関する近年の動向(その2)：実証的研究に着目して」『学校ソーシャルワーク研究』11, 54-68.

第2章 書き下ろし

第3章 書き下ろし

第4章 書き下ろし

学位論文審査結果の要旨

大友秀治氏の学位授与申請論文「スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョン実践モデルの生成—参加型評価を活用したエンパワメントに着目して—」につき、主査・山野則子教授、副査・児島亜紀子教授、小野達也教授、大島巖教授（日本社会事業大学）の4名による審査委員会において、3回にわたり人間社会システム科学研究科博士論文審査基準（社会福祉学専攻）に基づく審査を行った。審査委員会は、第1回目・2月15日13時30分より14時10分まで、第2回目・2月22日10時30分より11時30分まで、第3回目・3月1日12時15分より13時まで、A4棟302教室および301教室において行われた。

本論文は、教育と福祉の学際領域を扱ったものである。多職種連携が求められる時代に学際領域において活動するソーシャルワーカーに求められる、協働する組織や事業体制をつくり出す変革的なスーパービジョン（以下、SV）のあり方を、実証的に明らかにした意義深い研究であることが認められた。

1) 研究テーマが絞り込まれているか。

本論文は、子どもや家族の課題を解決するだけでなく、教育領域である学校という場において、その応答性を高めるという困難を有するスクールソーシャルワーク（以下、SSW）実践を機能させていくために、福祉と教育の背景を持つ、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWer）と教育委員会担当者それぞれの強みを発揮して協働し合う体制に変革していくために、SVに着目し、実践モデルを生成しようというものである。問題意識は明確で、「事業体制を変革するSV」というテーマは十分に絞り込まれている。

2) 研究の方法論が明確であるか。

本論文は、参加型評価に焦点化し、その実践を行っているSSWerやスーパーバイザー（以下、SVr）への参与観察と聞き取りを行い、いかに困難な課題に解決をもたらすように動いていくのか、M-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)によって分析を行ったものである。M-GTAは、データに忠実に分析を進め、明確化されていない現実世界を現象特性として明らかにするのに優れた手法である。単なる質的データの分類ではなく、分析対象者（本論文ではSVr）にあらわれる行為とその認識を深く追い続け、研究者の問いによる解釈をしていく。そして浮上した概念で構成されるストーリーラインが限定的理論として生成される。筆者のテーマであるこの領域の限定的な実践モデルとしての生成に適した方法といえる。

3) 先行研究が十分に踏まえられているか。

本論文は、アメリカで発展した SV 理論を、社会的役割理論、システム理論、臨床ソーシャルワーク、NASW の倫理綱領、関係性理論に体系的に整理し、普及の中心が、管理的機能を重視し、職場内部の上下関係を基盤とした社会的役割理論に基づく SV であるという課題を明らかにした。また日本における SV 研究においても体系的に整理を行い、管理的機能を業務管理として捉える傾向が強いことを示し、テーマである「事業体制を変革する SV」に対しては既存の理論だけでは不十分であることを指摘している。また SSW における近年の SV 研究についてもレビューを行い、その到達点と課題を明確化している。さらに、本テーマに対して SV 理論だけでは不十分であることから、「変革」概念に関連するエンパワメント理論をレビューし、テーマに近づこうと取り組んでいる。

これらの先行研究を丁寧に読み込んでおり、先行研究のレビューはおおむね適確に行われているものと判断した。

4) 結論に至る論理展開が説得的であるか。

本論文は、参加型評価の手法を活用している SSW 活用事業の SVr の語りから、SSW 実践としてではなく、SV の活動に焦点化し、SSWer のみならず教育委員会担当者や組織にまでアプローチしている全体像を構造的に示したものである。調査結果では、3段階のプロセスを明らかにし、第3段階の「構造的変革」に至るには、第1段階の「パワーレスに要因」に着目するところから始まり、第2段階の教育委員会担当者と SSWer 双方に対し「対話を通じた協働」を生み出すエンパワメントを重ねることの重要性を明らかにしている。これらの行為の背景に、自治体全体を俯瞰し、エンパワメントの視点を持ち続ける「変革推進を支える価値」が、SVr を支える基盤となることを示した。各段階において壁にぶつかる様相も示され、教育と福祉の交差する領域で活動する SSW への SV の苦悩を如実に表わしている。これらの結果を包括して、「事業体制を変革する SV」の実践モデルとして示したことは、説得的内容であると評価できる。

5) 研究内容に独創性があり新しい知見を提示しているか。

本論文は、以下の3点において独創性があり新しい知見として評価できると判断された。まず、第1に、評価の視点を、ソーシャルワーク領域から活用すること自体、ユニークな研究であり、SSW 領域に限らず、ソーシャルワーク研究において普遍的な実践モデルを生成したと評価できる。具体的には、大友氏の整理した、SV 研究にみられた権威性や統制という問題に対して、また独自の困難性を持ち、かつ解決困難な社会課題に対しても、「対話」と「合意形成」を重ねる、エンパワメントを目指す参加型評価を盛り込んだ。結果、これらの難問を払拭できる可能性をモデル化して明らかに示した。

第2に、さまざまな社会的課題に多様なアクターがアプローチすることに関心が高まっている時代に、学際領域（本研究では教育と福祉）で活動するソーシャルワーカーに求めら

れる、協働する組織や事業体制をつくり出す変革的な SV のあり方を、実証的に明らかにしたことは、時代に合致した新しい知見を導いていると共に、その社会的価値は高い。

第 3 に、さらに、生成したモデルを、ツールとして開発したことは意義がある。このツールを活用することによって、実践的活用を促すことになり、解決への示唆を導く可能性においても評価できる。

6) 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められるか。

本論文は、SSW を含むソーシャルワーク領域における SV 理論への貢献のみならず、評価学の領域においても、参加型評価のアプローチ法としても、ソーシャルワークからの活用という先駆性が高く、重要な知見を示し、学術的価値が高いと認められる。

以上の評価を踏まえ、審査委員会は本論文を博士（社会福祉学）の学位に値するものと判断する。